

2013年9月26日／浪宏友ビジネス縁起観塾

人間の本質

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「常不軽菩薩品」

1. 常不軽菩薩品の概要

- (1) 常不軽菩薩の故事
- (2) 常不軽菩薩の修行過程
- (3) 常不軽菩薩は、釈迦牟尼世尊の前身であることを明かす
- (4) 常不軽菩薩を迫害した人びとが目覚める過程
- (5) 以上を偈で繰り返す

2. 常不軽菩薩の故事

- (1) あなた方を軽んじません

ずっと昔のお話です。一人の修行者がいました。この修行者は、人に出会いますと、相手が出家の人でも在家の人でも、男性でも女性でも、礼拝をして声を掛けるのです。

「私は心からあなた方を敬います。決して軽んじません。なぜかといえば、あなた方は菩薩の修行をして仏の悟りに至る方々だからです」

- (2) 繰り返し礼拝する

この修行者はお経を読むこともなく、ただ人びとを拝み続けました。遠くに人がいるのを見つけるとわざわざ近くまで行って礼拝して「私はあなた方を軽んじません。あなた方は菩薩の修行をして仏の悟りに至る方々だからです」と繰り返します。

- (3) 怒鳴られても打たれても礼拝する

人びとの中には腹を立てる者もあって、何を言うか、お前の言葉などだれが信用するかと怒鳴りつけたり、棒切れを持って打ち掛かったり、石を投げつけたりします。すると修行者は走って遠くまで逃げるのですが、今度は遠くから大声で言うのです。「私はあなた方を軽んじません。あなた方は菩薩の修行をして仏の悟りに至る方々だからです」と。

出会うたびにこの言葉を言うものですから、人びとはこの修行者を「常不軽」と呼ぶようになりました。

- (4) 妙法蓮華経を説く

常不軽のいのちが尽きようとするころ、これまでに学んできた妙法蓮華経の教えをことごとく受持して六根の清浄を得ました。それによって寿命が増し、多くの人びとに法華経を説きました。

かつて常不軽を蔑んでいたけれども、常不軽が優れた力を得たのを見て説法を聞きに訪れ、心から尊敬するようになった人びともありました。こうして、常不軽は多くの人びとを、仏の悟りへと導きました。

(5) 仏の悟りを得る

常不軽は、その後多くの仏さまのもとに生まれ、法華經を受持・読誦し、多くの人びとに教えを説き、ついに仏の悟りを得たのです。

そのときの常不軽菩薩は、実は、釈迦牟尼世尊の前身でした。

お釈迦さまも、人間すべてがもっている仏性をお悟りになり、その顕現に努力をつみかさねられたからこそ、仏の境地に達せられたのです。

(6) 迫害をした人びと

常不軽に瞋恚の心で迫害を加えた人びとは、長い間仏に会うことができず、真理の教えを聞くことができず、修行者たちに出会うこともできず、阿鼻地獄に落ちて大苦悩を受けました。

(7) 目覚めた人びと

大苦悩を受け終わって、ようやく正気を取り戻した人びとは、「私はあなた方を軽んじません。あなた方は菩薩の修行をして仏の悟りに至る方々だからです」という教えを受けた縁で、常不軽の説法に出会い、仏の道を学ぶことができました。今も、釈迦牟尼世尊のもとで教えを学んでいます。

3. 常不軽菩薩の行（庭野日敬著『法華三部經 各品のあらましと要点』p. 191～192）

(1) 仏性を拝む

常不軽菩薩の行というのは、はじめはたんに、〈人びとの仏性を拝む〉という行だけでした。

(2) 教えを説く

人びとがようやく自分の仏性に気づくようになったら、こんどはそのことを〈教え〉として説かれました。

(3) 常不軽菩薩の行から学ぶこと

そのことを、われわれも見習わなければなりません。

まず〈すべての人の仏性を認め、それを拝む〉ことから出発し、それから〈真実の教えである法華經を説いて、大衆の仏性を顕現する〉ことへとすすまなければならないのです。

そういう積極的な努力をしてこそ、自分も悟りを深めることができますし、世の中もほんとうによくなるのです。

(4) 粘り強い努力

その努力も、常不軽菩薩のように、いつも変わらぬ信念をもって、気長に、粘りづよく行なわなければなりません。すこしやってみて、おもわしい結果があらわれないからといってすぐあきらめてしまったり、現実の世界のあまりのひどさに失望してさじを投げてしまったりしたのでは、自分も、世の中も、ついに救われることはないでしょう。

(5) 不動の決意

人間の仏性は不生不滅なので、「なんども生き変わり死に変わりしながら、あくまでもこの偉大な仕事をつづけるのだ」という、不動の決意をもたなければならないのです。その点においても、常不軽菩薩は尊い手本であるといわなければなりません。

4. 本質的な救い

(1) 肉体へのとらわれ

人間の不幸のおおもとは、「肉体だけが自分である」とおもいこんでいることです。この肉体へのとらわれがあるかぎり、なによりも自分の肉体を維持し、満足させることを第一に考え、ほかの人のことなど二の次になりますから、つい奪いあいや足の引っぱりあいなどの争いが起こり、したがって不安・悩み・苦しみなどの絶えることがないのです。(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.188)

自分の肉体を維持し、満足させることを考えることが悪いわけではありません。

自分と同じように、ほかの人も、その人の肉体を維持し、満足させることを考えていることを、忘れてたり、無視したりするところに問題があるのです。

自分のことだけを考え、他の人のことを無視する人びとが、奪い合いや足の引っ張り合いをして争っているすがたを、私たちは現実に目にしています。家庭不和、職場の乱れ、社会不安、国家間の争いなど、際限がありません。

(2) 仏性にめざめる

人間を根底から救い、人類社会をほんとうに平和にするには、どうしてもこの根本のとらわれをうち破り「人間の本质は仏性である」という真実に目覚めなければならないのです。(同p.188)

「人間の本质は仏性である」という真実に目覚めるとは、自分も修業次第で仏になれると目覚めることであり、ほかの人びとも修業次第で仏になれると目覚めることです。仏性に目覚めた人は、自分・自分と関わりのある人・世間のあらゆる人びとのしあわせを考えながら、自分のなすべきことに励むようになります。

(3) 倫理・道徳の限界

日常の心のもちかたや行いについて、悪いことをやめ善いことをするように一々こまかく指導するのも、人間をよくするだいな方法ではありますけれども、ただそれだけではなかなか効果があがりません。(同p.188)

倫理・道徳の指導には、どうしても他律のニュアンスが残ります。このために自立性(自主性・自律性)が深まりにくく、限界が生じるのだと思われます。

(4) 自尊心

ところが、人間の本質が〈仏性〉であるという真実にめざめれば、ひとりでの悪いことなどできなくなります。みっともなく、恥ずかしくて、できはしないのです。(同p. 188~189)

自分の本質は仏性であると心の底から確信しますと、善いことを行なうことが当たり前であり、悪いことを行なわないことが当たり前になります。実感としてそうなるのです。このため、頼まれても悪いことはできなくなりますし、頼まれなくても善いことをするようになります。

(5) みんながきょうだい

また、ほかのおおくの人びとについても、みんなが本仏に生かされ、仏性をもつ存在であるという根本道理にめざめるならば、おたがいがきょうだいであるという実感が湧きますから、ほんとうに仲良くすることができるわけです。(同p. 189)

自分は本仏の子である。ほかの人びとも本仏の子である。このことが芯から分かりますと、自分とほかの人びとは、根本的な意味で兄弟なんだと、自然に思えてくるのです。ですから、自分・自分と関わりのある人・世間のすべての人びとが、みんな一緒に幸せになることを心から願うようになるのです。